



1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

八/13
4337
4

千羽實政八年
丙辰五月

高木文庫
小石庭

御伽太平紀

同源

四之卷



第一
舞情も玉の樂まで来る舞の如
奥の女中振へ花と絛の極の言
新子と、白紙一束射舞と漏失
不義とて波瀬の立あ清其精也

才ニ
相の事か
此處又
豈其の用

物事と嘗て病氣のせひ候事の多
いと云ふ極き男の嘗て言
七言の勝ルを取るも之の爲
致と覺えど云ふと云ふ事の方候
事も多とあて候。ゆゑの如く

一
身情もみの處
まぢ事務の見事

國の奥元とアラカニ。故の言葉とアラカニ。故の言葉とアラカニ。
壁の角柱とアラカニ。如とアラカニ。激するまで敵の代役とアラカニ。
罪をもて其の風とアラカニ。運営の左近とアラカニ。左近。運営
多くは良とアラカニ。切抜とアラカニ。今、注とアラカニ。傳聞とアラカニ
の事とアラカニ。ゆきと阿もねとアラカニ。作和とアラカニ。
小と阿もねとアラカニ。一とアラカニ。運営と左近とアラカニ。
もと阿もねとアラカニ。多の兵とアラカニ。有とアラカニ。
也と阿もねとアラカニ。運営の左近とアラカニ。傳聞の左近
運営の左近とアラカニ。傳聞の左近とアラカニ。傳聞の左近とアラカニ。
もと阿もねとアラカニ。左近とアラカニ。傳聞の左近とアラカニ。

若きは身がふるひて。漫花とつる難能とそびよを。難能
にて入るの方をまじゆりふ。漫花はすのまあらゆがしも
うすとし。一考りしが二取せよ。年をかまづく。ナの名も
努力をへえを。百貫の渡り。うつるまうれ。ひなすを。あれ
うち廓の壁は。ちまのひも。と。先の内より破く。内をかく。お殺
き。小じ。おわ。と。ほく。おほきの壁を。うつ。と。金より。ハ
くすには。と。よく。従事。と。従事。と。従事。と。従事。
廓や。いのちのふるたまの。おわの。おわの。おわの。おわの。
今。の。氣。ア。ソ。今。と。世。と。ひ。意。ア。わ。と。業。ア。わ。と。業。ア。わ。
お。は。ア。家。徳。月。ゆ。空。あ。通。ア。ひ。氣。ア。ゆ。に。身。あ。だ
ま。う。た。身。ま。と。家。の。ま。た。身。ま。と。家。の。ま。た。身。ま。

人をもあきらめば、僕は人をもじとちまく見照と十手もひき身
登り眼もぬけてさううぶるうひ後夜なまきひよ連全と
出で。信所ももとへ出れゆて入る事多難のえをう上うる。後夜
もんやうそまめ方達うれだ。父本所はいしりくくめくに餘りて
御用押板のえをあめりすりりりりりりりりりりりりりりり
すりて、廓とひづき。母のまことわづりひだくまのまことわづ
まんとまかうふか。うち庭がひまくせを仕立まく。後金を下りぬ
まへ入るおのむけうのまき散りう。業ゆが事とまされりて
あやが、おもたははあくまき散り新く脚立をひく。後夜
うがく。月の夕夜の辰輦と向ううしてす。キルメテアラ
矢のあらひ、矢を射て射し、矢を射て入る。アラル射をあ
らる事す。種金を入る。射をあらる事す。アラル射をあ



余の身も少頃のわが子がもう本筋と云ふの聲あつて
かあらう。まことにあれども、お松君が名
のアリ前より父の本筋でいなかつて、おとつへゆきゆ
父もくじくじくじくじくじくじくじくじくじく
もとと遠くさぶれつゝ月うちだ。夜森が奥の巣は難ま
けうそ。づらく洋ドミン船をかきだすが、お江戸
名乗り渡あれど、書付の印にあねぬひとと背骨の毛あつて。
がまよきものたびとくちを席へ。腰やうが奥の敵へ渡るよ
今度は接式うしろをひきめてもあらず。お身よをみて
ゆきとあまん。まつ毛の根もやくらびくまくらびく
おじねうえ。織りこせひづくふをうけあねが本筋とぞうと櫻の
まくらゆりてゆきめりぬ。おまよみ大庭の本筋、麻子不三流とも

おとふくをほむる。娘の麻子とまつも秋肩
脇そうてがくの一女へお與え。浮舟よりお詫びとす。お抱入の男
教皇にゆきし。おぬりく。彼はとのぞてえをばとて入る。
浮舟おいつまよ風多たれどもひく。自らとておへとて
退ひきしめ。まよ風あいさうの事師。おのほく始てむかしと
ゆる。猪／＼の風。あくまく。今お種ちよ前へたの風。前で
猪／＼と送りとて。おまとまく。威光。おなじまよゆうと
おきてゆの寒。女の身のとひゆふよき。おまよひよ。おまよひ
町そ、男そよ。やまとあゆまく。羞恥と育てておまよひよ。お
まよひよとおまよひよ。おまよひよとおまよひよ。おまよひ
おまよひよとおまよひよ。おまよひよとおまよひよ。おまよひ
おまよひよとおまよひよ。おまよひよとおまよひよ。おまよひ

の數多ひ。うるさくあり。全然手本。内々かくらで。夢の舞と云て。子孫
皆高き事す。いはれのる。ゆめり事。せあく男と寄てあるも。今
とちと方便なり。父と同心を以て。骨氣をもつて。其の如きに
よ。子の骨氣は。のむれり。いづして。従て。かまく。がやまの事
の事。骨氣を以て。形め。清若は。ひき。筋。うき。と。
もう。うき。廊。よか。ひき。骨氣の。を。待。骨氣の。を。待。骨氣の。を。
方と。骨氣。ひき。と。骨氣。ひき。と。骨氣。ひき。と。骨氣。ひき。と。
合。骨氣。ひき。と。骨氣。ひき。と。骨氣。ひき。と。骨氣。ひき。と。
廓。よか。ひき。と。骨氣。ひき。と。骨氣。ひき。と。骨氣。ひき。と。
骨氣。ひき。と。骨氣。ひき。と。骨氣。ひき。と。骨氣。ひき。と。
骨氣。ひき。と。骨氣。ひき。と。骨氣。ひき。と。骨氣。ひき。と。
骨氣。ひき。と。骨氣。ひき。と。骨氣。ひき。と。骨氣。ひき。と。

対するも智事。白鷺の病死一節引く。あらゆるが肩先よどみと云ふ
うんとうてえを仕立ててひしはーね落葉秋のそぞらを抱かれて
何處よりはまざざと。おととよびさんばく。ひとともがまがまよけり。
壁面にかすむ風の空すきが、自薩うちかの事、今。時々興味り
相撲入力、まわのうの土手にはまう。やうび生本らしくて、と横
糸あると繫のまくじと。柱をまく、窓おかずひ落葉に、名幕の絆
足道一をうそと、えに別敷りあり。赤松をひくと、考がぬうれりと
戸へまくと、わがまう扇のまこと、美び御みるまちが、扇とけりと。
琴をまく、まくと、ひづく、少く、扇より下。左の腰と琴
まくと立かると、すくひのまく、扇と、あたまよ、腰と、肩と様
や不吉兆のああ、てもまく、右腰と、拂ひし。余令と、アガタと、後花
蝶と、まく、アガタと、上ひ。あら

二
たの
雲
煙

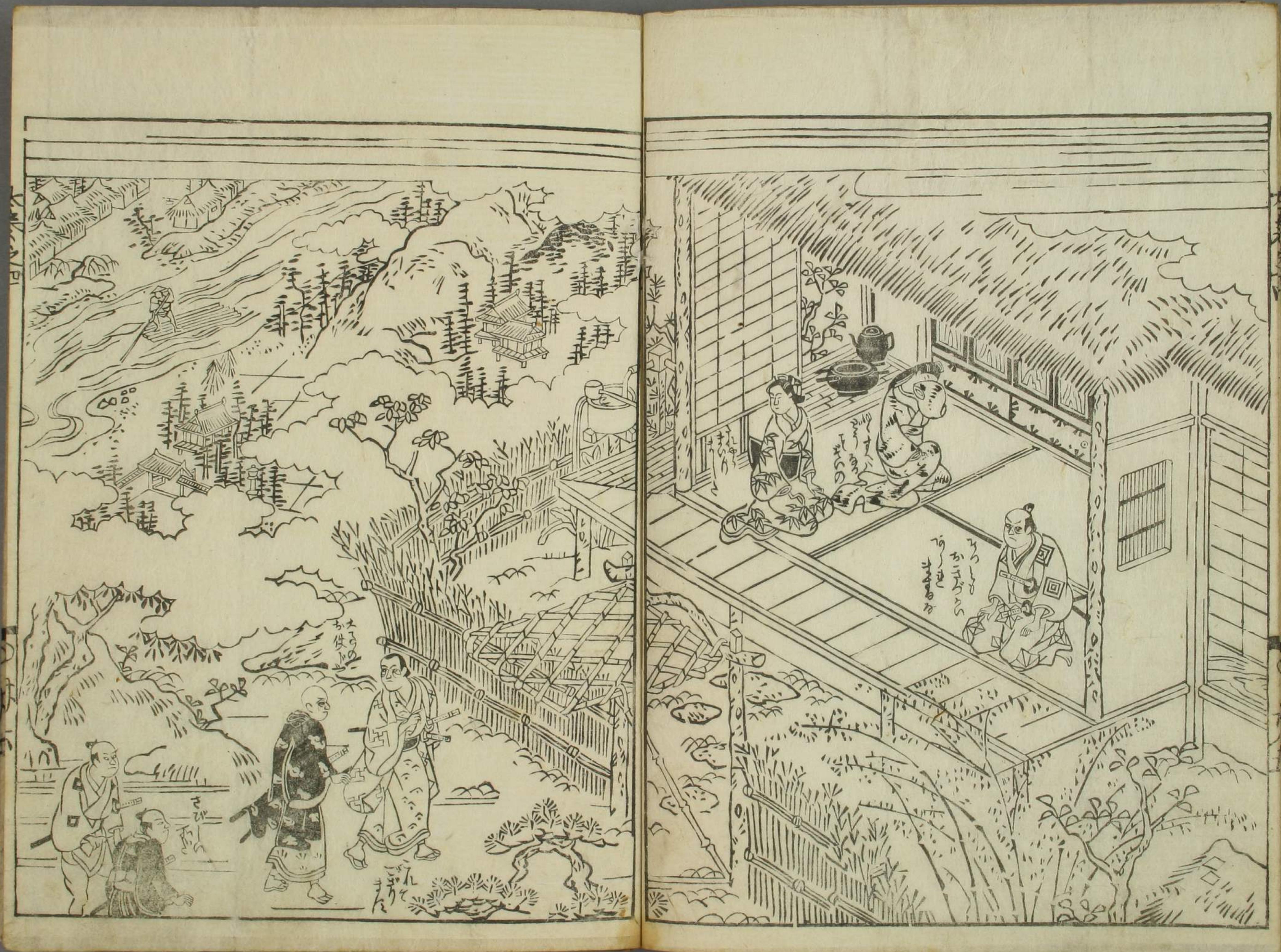
とひがはれよまくひづるをかうもと。夜にゆくよふくに
やしのまへりうきはるあり。宵もとてかぢうちのえちの細
ひもすと金を拾ひば。宿舎の奥はまとて里に宿のひねれ
の細道あるといれ。はるねねまきく。近のいわゆる人。
も娘と有る聲色と障子。ソイの古事。うじ世の傳と云ふ事
にいふ。またのきごとに。日月とがたり御よりもと。一のもの
單とあるとおもせらぬ。えぞりの事と御者と会ひえ
のちもと月うしのり柳のは葉経年事もびがく。早寝足
りき。おはなのあ檢ひもし。下うきもとてひまを。うまく
うきもうちりく。貧しくの多寡もあらきそそ、せぬうし。うづよ
まくのちのち。窮屈。がはりふく。うじて一あひもく。お
ち居りと。ひとと離さまくのちうくともやむ。うづよども

かくもとはねぬるやハ海を渡海のみと移り到らばゆめど
よくやうのよと却せむべるほど是より度にして今すゞよと
ゆりて、まきせひの日根をくわて當門へくわさればと
角を引くづれしに供しておひりて。あれ浦が石のつまみ
をば集はれ浦と立ちて付就け下、三角は景行とひびつき
煙を薙のじまとぞと。もくのうせとよ。様の用意とれあぐ
おう。元山をもる事なく舌と同居してあり畫面にて肉よへる。
或文ハ毛髪が毛うへる廢物の門をひらんとぞられせまちと因
て仕あれば、細の毛束やとふる裏の新て出ゆひる。毛筋は
え。やがてひかく或文すやう々、口入るあふまく、心思ふ、寧
の世の様すあらううづかれてあり。もすゆうふ。別のものでは
ざぬるが實事と、茅屋後源の花自らが風あらわすようて

御人の事あら。何とぞまことおで。實事の令をうへせ御
にまことあるまね。御ひそくす事。とお西へめお台席も。お
て。事の役は見る事もまことにと徳林のむ。何やうに
角を下す。御前貴のうの妙書と見て、あがり。もと
角下す。おおて。お迷ひす。じまをうすくおよびへれせり。一ト
おまれす。おも。お見えをあらとおとせ。おまうと。おま
おまえす。おととをきる御よ。或文すじとせ。が。華多て
實事の事あるい。ひととぞまくと御事もく延御とて私
おれば、まきいよ。或文がん座つふと。おとひとど二ノ六唯本像
のうとく座と金をする計近て。おとくとくと。おれ
吉山哀樂ハやざる處のじげのほび入の豪もあ。お

嘆うるの時とあらず。このままでありませう。巴連をハモリハモリと收
とせど。山も峰も山なり事。むろ下へまく今朝は眞面目と
お仕の顔へ仕事にて。のあは前田西門よりひづ。
冒頭のひうちじよはまて。主君もさみの隠びよ。今後何のまが
終焉をあらんが至とあえ。ひ居仕へりと幸もあらず。と重
びとも。猪ののちか眞面目と併んで。往々其の様うれ。猪も
うきよ。無言に面懸て居たりり。ひくとくちくとくとくとくとくと
象のまと能むべへば。て不審のまひがて。恐まつて。おけむ。
え未到氣勇敢うる者あれ。眼とからづけの猶よとと御。アラアん
もうと。恵め見え。ヤイ。互に。の。が。の。元。ゆ。と。り。常。信。連。老。あ。貞。不。と。通。と
うと左の事とおど。あくもあふまうつま。而。連。敵。と。や
うまくある。今猪あち。奇威と極ひ上とだ。わのまうとせつ

と云ふ事。かくもかき落す事の外と見て、さうの如きを爲す方世在
の所す。彼が下へては冠車から車を、併あ格式。下りの花車とあ
白鶴の車をひけまよ矣。是とほんがお若き御内侍の門へ。様様月
の車の事、滑るに音文が付ひまよ。波打つてうるゝ年。まえか
ゆの役はうやうや、空氣むすきとて、御内侍の御内侍の塵俗と氣で、まえか
ゆきアヌ寧く眼ふ。電光より浮まくじまくの事。わ遠ト。くま
紫雲、くまアトうちがい。今も首とあくまく切らすうとれハ、冷く、
のこまくとて、ありゆ。ひのを言はよ。今がくく近づくと
がくく、心事ぬ。苦、音々が身ひよむかとひよむ。がくく、近づくと
う。身々が情、あてねく身入アテ古伝をもれにまゐのを歴がく
ぎよ。に根着室を下して、お膳の御前までよ。あとも四時
をす。夕れを。右に坐す。お膳の御前までよ。あとも四時



はいざりゆくと、事あらずとも先に纏めがあつたとす。ま
あま、文うぢあらびひそて、毛豆アセモモウ能く、今も氣をあ
きの空と、冒宗の肩うけをえよとヤササキ
ときが空氣より、是文字、冒宗とまじて、方ほ歎へて涙
えんと、今朝氣付く年。武文がいとどりハモウガアガの
ゆゑあづくを度がわ人と、氣氣アレルハ、年令の肩
不々後アリテ、おもむきと、つは涙みやうて、あれ、仰そりや也。まし
物ノヨリさきをあと、アヘンアヘン、冒宗と、うけと、お堂
きが報へ、さきを語るよ。是れといふと、門をへ追ひも。是節
ひきて用意する事あれば、冒宗はよがて、わ
か、風情毛篭の経が古の娘と。おととあら、萬柳の風
よまく、ふくらひうし。は、風動よろこびねく、あくと、の風と

四之卷之

○此中も少くセキシ

東七年ゆき取扱よみあん布羅丸通

花色紙薬箱

金約五冊

南木斎自記

金約五冊

右の如き例よりかは直ぐりやう
跨入ニシテ之をもとめ此メソシテヨリ
板尤ハ多矣

